

5.2 河川に生息する生物の確認状況（河川の自然度・健全度）

ここでは生態系の健全さの指標となる生態系上位種のヘビ類や、河川敷の草地環境を利用するカヤネズミなどの確認状況を整理しました。なお、1～3 巡目調査との比較は、調査の範囲や時期、回数などの条件が必ずしも同一ではありません。また、移動性の高い種や、限られた季節にしか見られない種もあることから、比較結果は同一河川での消長を示すものではなく、全国的な傾向を把握するための参考です。

【河川の自然度（爬虫類の確認状況）】

（両生類・爬虫類・哺乳類調査）

● 全国のほとんどの河川でシマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシ、マムシを確認

地域の生態系の良好さをみるため、生態系の上位種であるシマヘビ、アオダイショウ、ヤマカガシ、マムシの確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った 10 河川のうち、シマヘビは 7 河川、アオダイショウは 8 河川、ヤマカガシは 7 河川、マムシは 7 河川で確認されました。また、2 巡目調査から今回の調査結果をみるとヤマカガシとマムシで確認河川数の増加がみられました。一方、シマヘビで確認河川数の減少がみられました。また、アオダイショウでは確認河川数に変化はみられませんでした。

（資料掲載: 5-8～5-11、5-37～5-40ページ）

確認河川数の比較

種類	1 巡目調査 (3 河川)	2 巡目調査 (10 河川)	3 巡目調査 (10 河川)	今回調査 (10 河川)
シマヘビ	3 河川〔100〕	9 河川〔90.0〕	8 河川〔80.0〕	7 河川〔70.0〕
アオダイショウ	2 河川〔66.7〕	8 河川〔80.0〕	8 河川〔80.0〕	8 河川〔80.0〕
ヤマカガシ	2 河川〔66.7〕	5 河川〔55.6〕	7 河川〔77.8〕	7 河川〔77.8〕
マムシ	1 河川〔33.3〕	2 河川〔20.0〕	4 河川〔40.0〕	7 河川〔70.0〕

1～3 巡目のデータは今回調査が行われた河川のうち、種名等について真正化され、河川環境管理システムに格納されている調査データを対象にした。

（ ）内は対象河川数を示す。

〔 〕内は確認河川数の対象河川数に対する％を示す。

ヤマカガシについては北海道地方に分布しないため、対象河川数は 1 巡目では 3 河川、2 巡目から今回調査では 9 河川です。

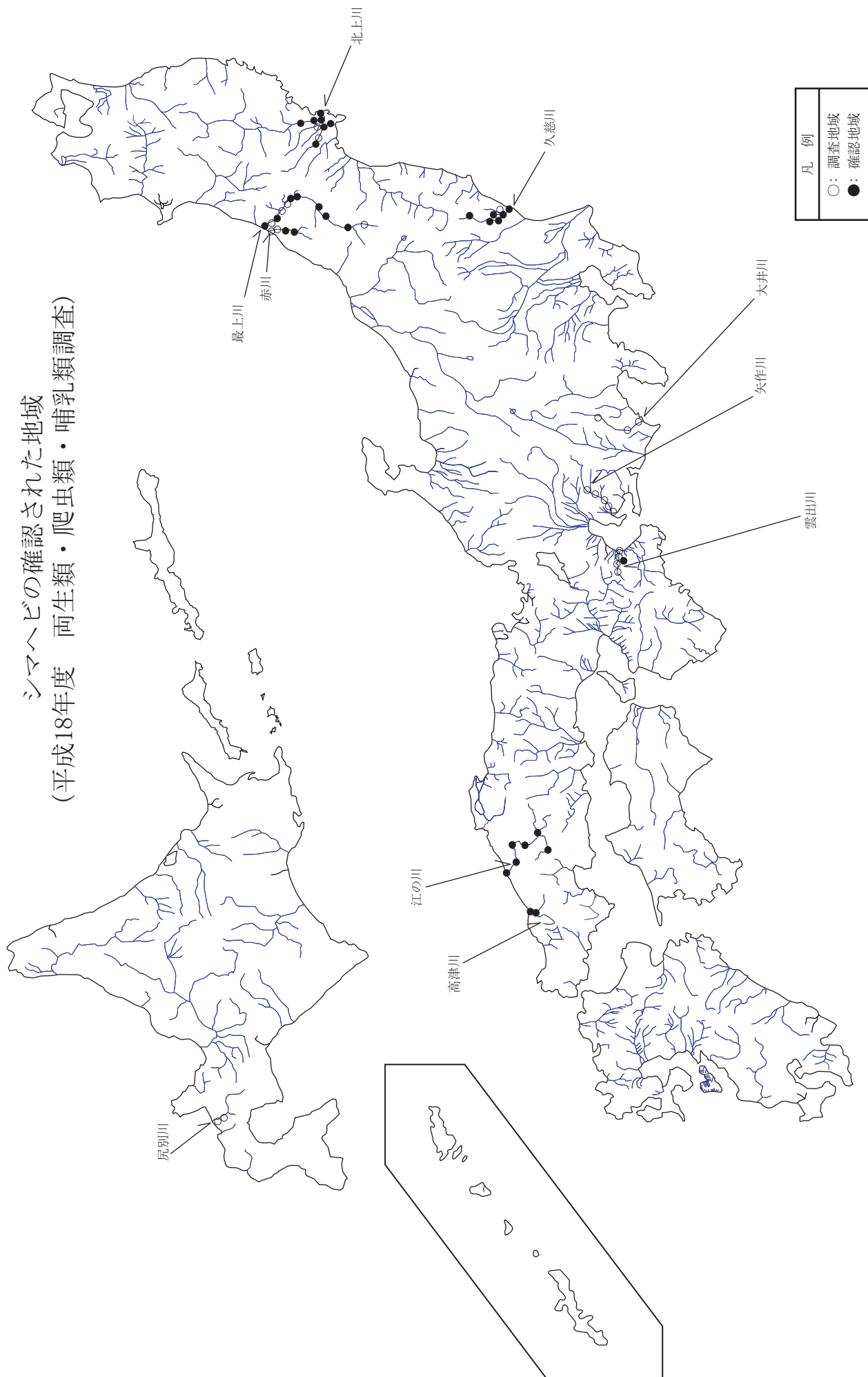
生態系の上位種は、環境変化による種構成の変化、また、それに伴う餌生物の変動などの影響を最も受けやすいことから、地域の生態系の変化をみる上で重要なグループであると考えられます。

シマヘビとアオダイショウは北海道地方から九州地方まで分布し、ヤマカガシは北海道地方を除く本州から九州地方にかけて分布し、マムシは北海道地方から九州地方にかけて分布しています。今回調査では、シマヘビとヤマカガシは東北地方から中国地方までの広い範囲で、アオダイショウは北海道から中国地方までの広い範囲で、マムシは北海道地方から中国地方で確認されました。

また、2 巡目調査から今回調査をみると、ヤマカガシとマムシで確認河川数の増加がみられました。一方、シマヘビで確認河川数の減少がみられました。また、アオダイショウでは確認河川数に変化はみられませんでした。

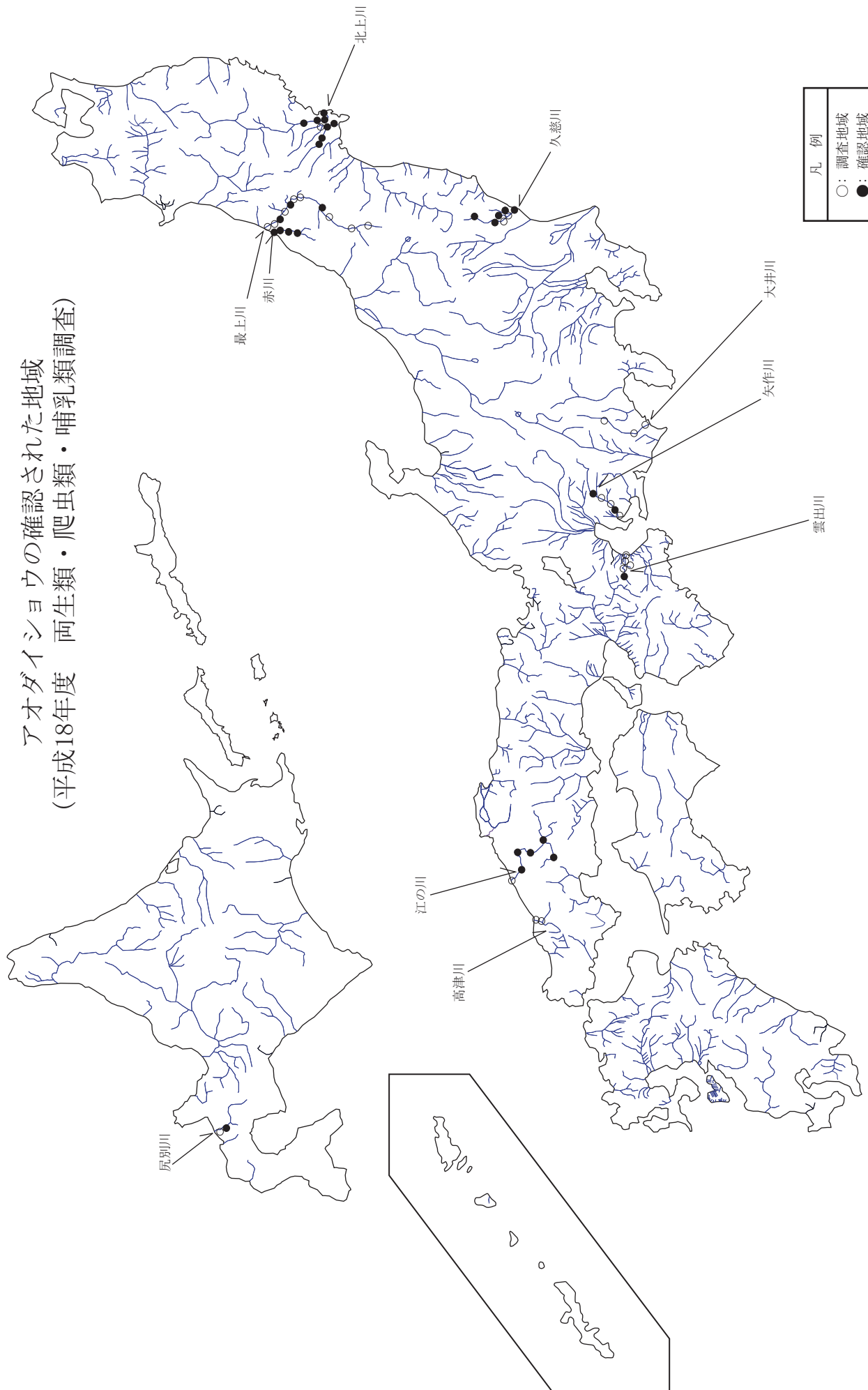
これらのことから調査対象河川においては、これら生態系上位種の生息が可能な生態系が維持されているものと推測されます。

シマヘビの確認された地域
(平成18年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。

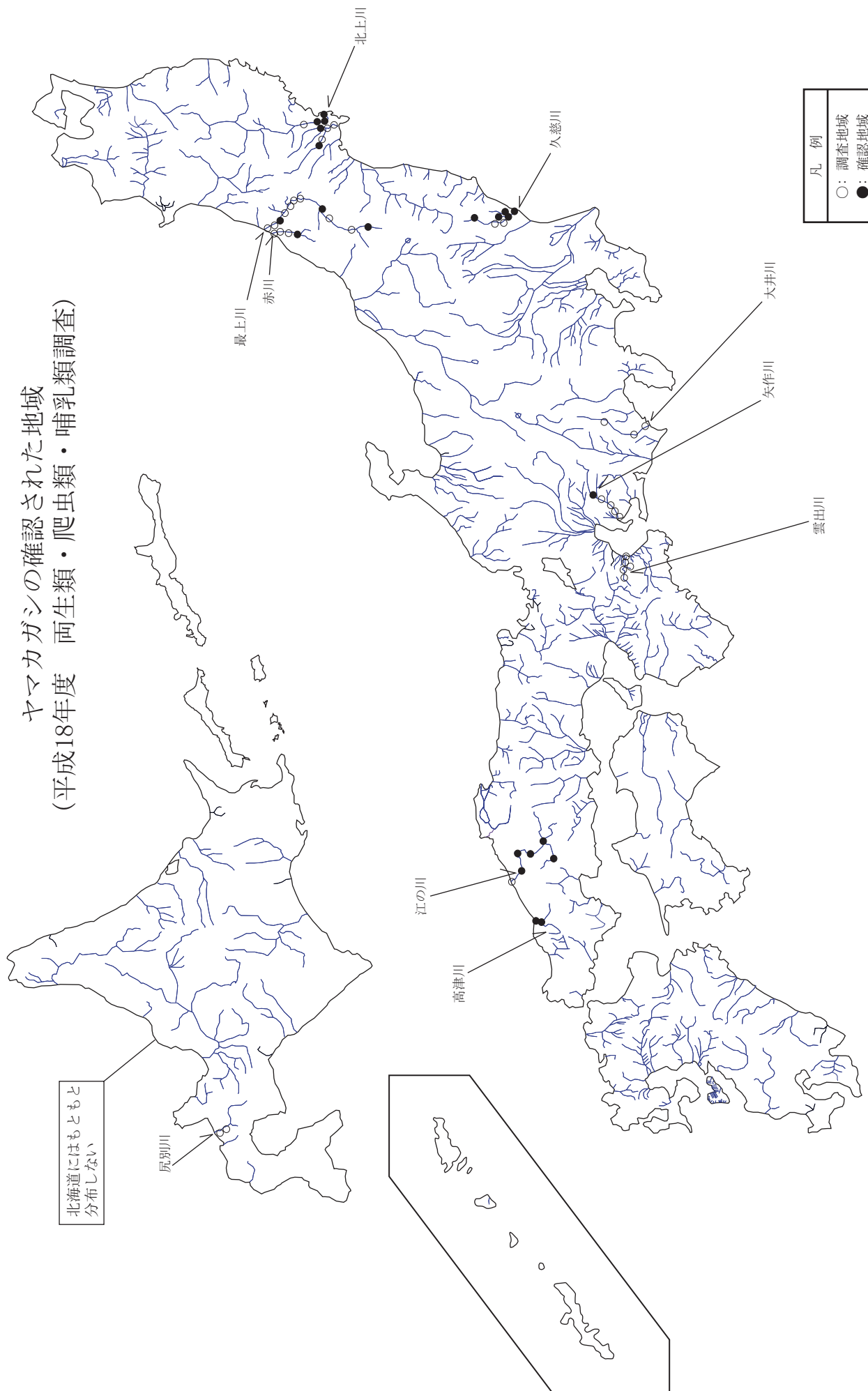
アオダイショウの確認された地域
(平成18年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



凡 例	
○	調査地域
●	確認地域

注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。

ヤマカガシの確認された地域
 (平成18年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)

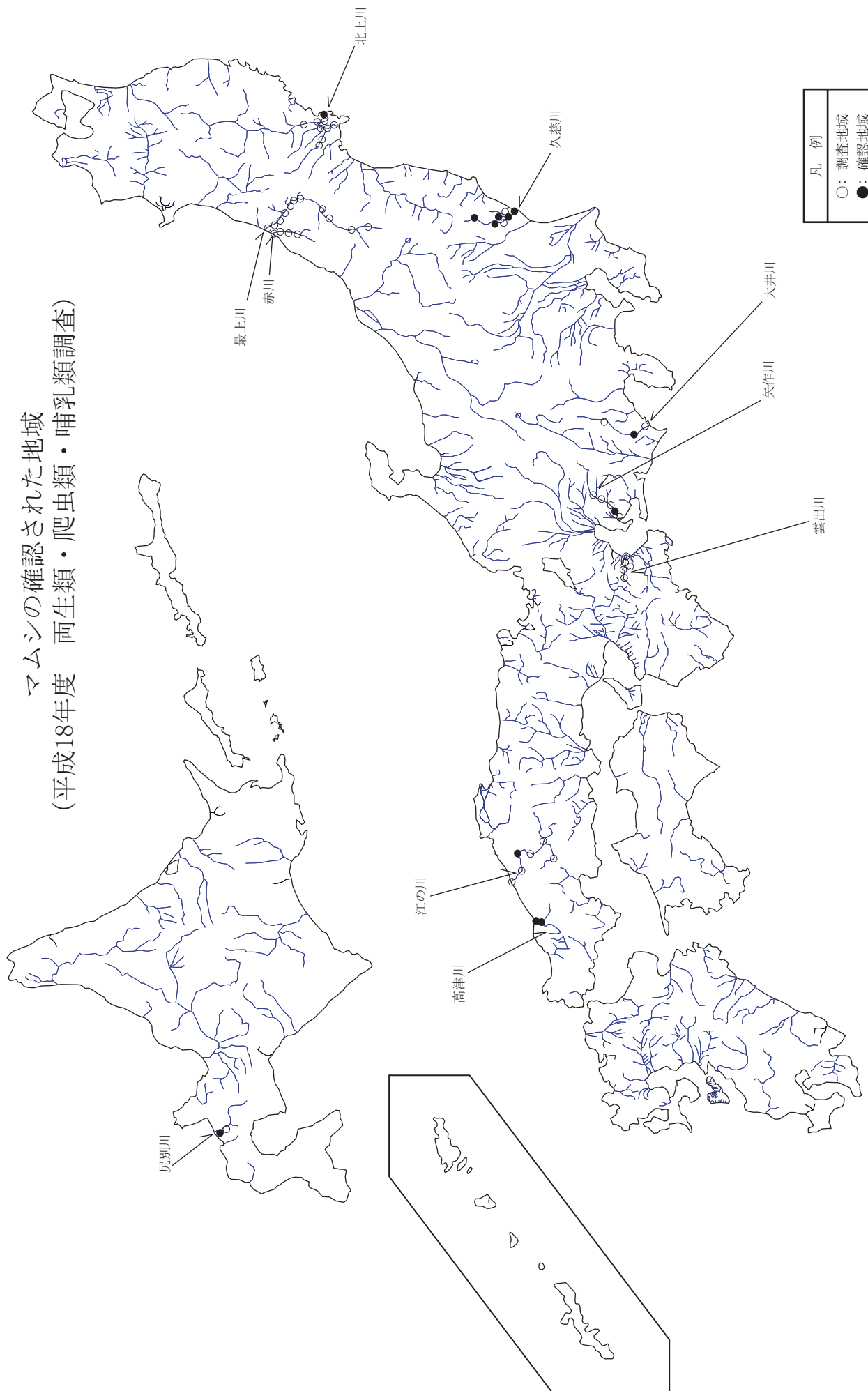


北海道にはもともと
分布しない

凡 例	
○	調査地域
●	確認地域

注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
 ○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。

マムシの確認された地域
(平成18年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。

- **全国の全ての河川でイタチ科を確認**

河川周辺における宅地化などにより、生息域が限定されつつあると考えられている中型哺乳類であるイタチ科 (テン、エゾクロテン、イタチ、アナグマ)の確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った 10 河川の全ての河川でイタチ科を確認しました。また、2 巡目から今回の調査結果をみると、イタチ、アナグマで確認河川数の増加がみられました。

(資料掲載:5-13～5-15、5-37～5-40ページ)

確認河川数の比較

種類	1 巡目調査 (3 河川)	2 巡目調査 (10 河川)	3 巡目調査 (10 河川)	今回調査 (10 河川)
テン	2 河川〔66.7〕	4 河川〔40.0〕	4 河川〔40.0〕	5 河川〔50.0〕
エゾクロテン	0 河川〔 0〕	0 河川〔 0〕	0 河川〔 0〕	0 河川〔 0〕
イタチ	3 河川〔100〕	7 河川〔70.0〕	6 河川〔60.0〕	9 河川〔90.0〕
アナグマ	1 河川〔33.3〕	2 河川〔20.0〕	4 河川〔40.0〕	4 河川〔40.0〕
イタチ科	3 河川〔100〕	8 河川〔80.0〕	8 河川〔80.0〕	10 河川〔100〕

1～3 巡目のデータは今回調査が行われた河川のうち、種名等について真正化され、河川環境管理システムに格納されている調査データを対象にした。

() 内は対象河川数を示す。

[] 内は確認河川数の対象河川数に対する%を示す。

イタチ科：テン、エゾクロテン、イタチ、アナグマ

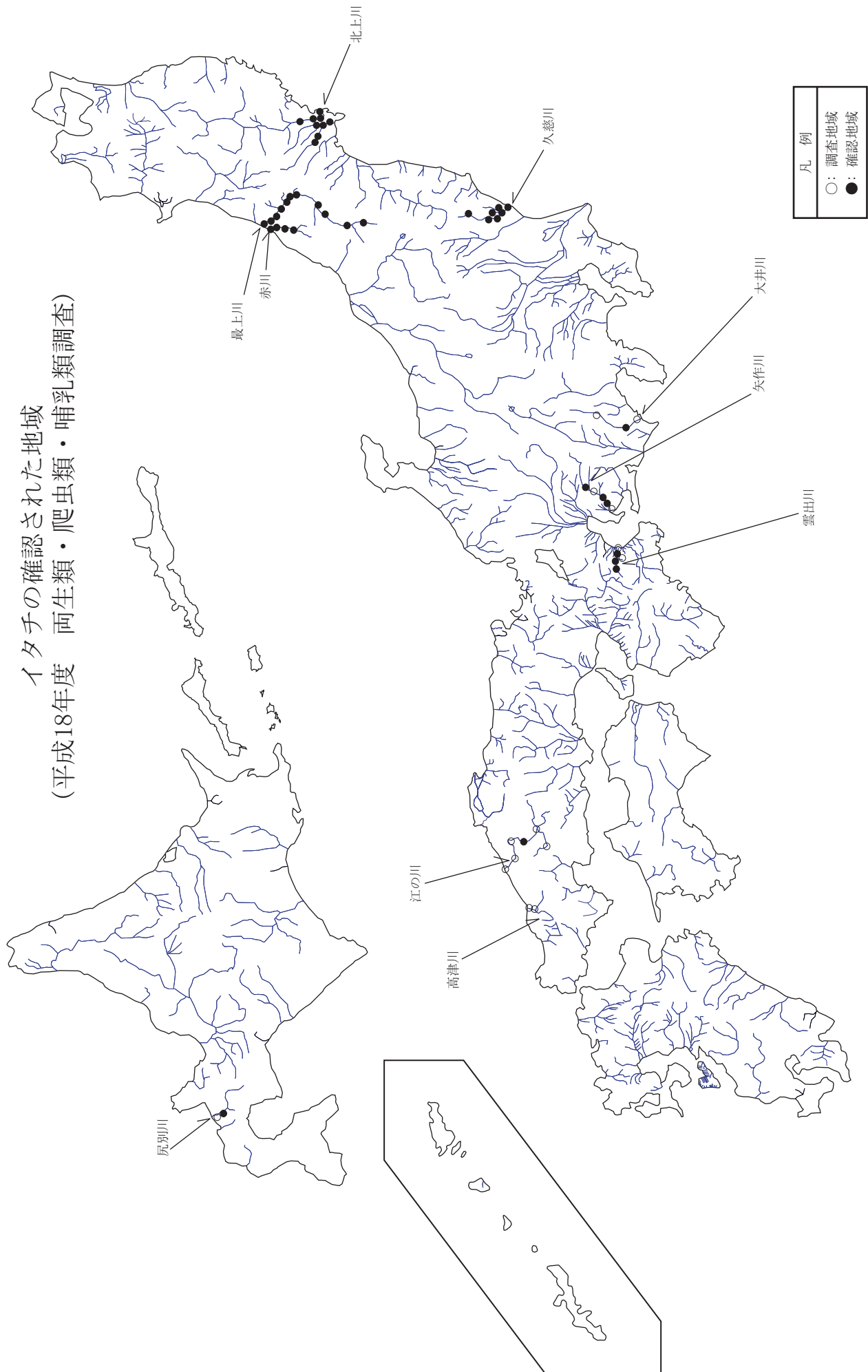
河川周辺における宅地化などにより、生息域が限定されつつあると考えられている中型哺乳類であるイタチ科 (テン、エゾクロテン、イタチ、アナグマ)の確認状況を整理しました。

イタチ科は雑食性に近い肉食性の動物で平地から山地の川や田んぼ等の水辺周辺に生息しています。

また、2 巡目調査から今回の調査結果をみると、イタチ、アナグマ、イタチ科で確認河川数の増加がみられました。

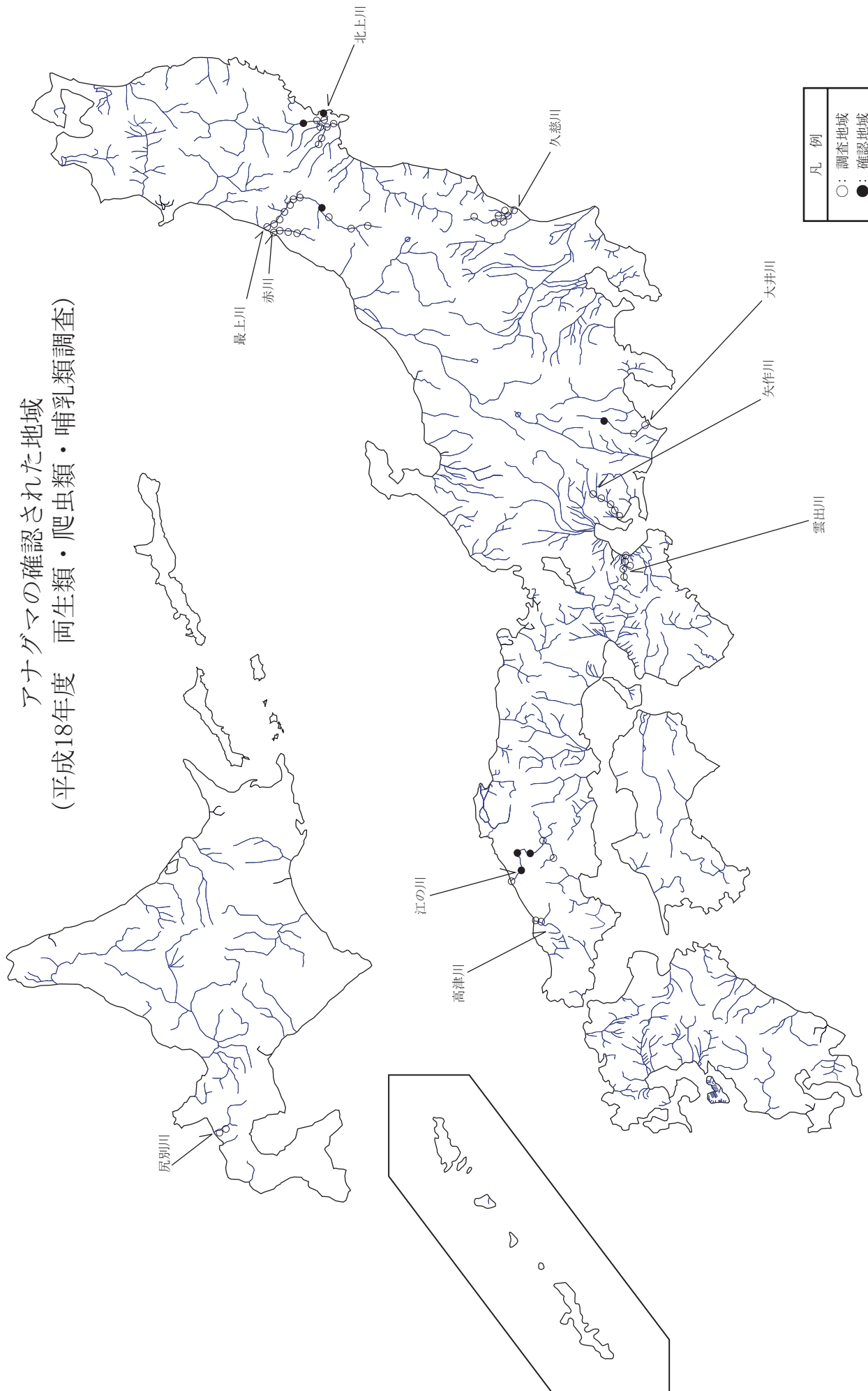
このことから調査対象河川及びその周辺環境は、これら中型哺乳類が生息するのに適した環境を有しているものと推測されます。

イタチの確認された地域
(平成18年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。

アナグマの確認された地域
(平成18年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。

【重要種の確認状況の変遷】

(両生類・爬虫類・哺乳類調査)

● **重要種の確認状況の変遷に大きな変化はみられず**

重要種（地域個体群や情報不足を除く）を対象に、その確認状況の変遷を整理しました。対象としたカスミサンショウウオ、トウホクサンショウウオ、トウキョウダルマガエル、イモリ、カモシカは、今回とりまとめを行った 10 河川のうち、カスミサンショウウオは 2 河川、トウホクサンショウウオは 2 河川、トウキョウダルマガエルは 2 河川、イモリは 5 河川、カモシカは 2 河川で確認されました。

また、2 巡目から今回の調査結果をみると、東北地方の北上川と関東地方の久慈川のイモリを除いて、2 巡目もしくは 3 巡目調査で確認されていたにもかかわらず、今回調査で確認されなくなった対象種はみられませんでした。

(資料掲載: 5-18 ~ 5-22、5-37 ~ 5-40ページ)

確認河川数の比較

種類	重要種種区分	1 巡目調査 (3 河川)	2 巡目調査 (10 河川)	3 巡目調査 (10 河川)	今回調査 (10 河川)
カスミサンショウウオ	絶滅危惧 類(VU)	0 河川 〔 0 〕	0 河川 〔 0 〕	0 河川 〔 0 〕	2 河川 〔 20.0 〕
トウホクサンショウウオ	準絶滅危惧(NT)	1 河川 〔 33.3 〕	2 河川 〔 20.0 〕	2 河川 〔 20.0 〕	2 河川 〔 20.0 〕
イモリ	準絶滅危惧(NT)	1 河川 〔 33.3 〕	5 河川 〔 50.0 〕	6 河川 〔 60.0 〕	5 河川 〔 50.0 〕
トウキョウダルマガエル	準絶滅危惧(NT)	1 河川 〔 33.3 〕	2 河川 〔 20.0 〕	2 河川 〔 20.0 〕	2 河川 〔 20.0 〕
カモシカ	特別天然記念物	0 河川 〔 0 〕	2 河川 〔 20.0 〕	2 河川 〔 20.0 〕	2 河川 〔 20.0 〕

1～3 巡目のデータは今回調査が行われた河川のうち、種名等について真正化され、河川環境管理システムに格納されている調査データを対象にした。

() 内は対象河川数を示す。

〔 〕 内は確認河川数の対象河川数に対する % を示す。

河川環境の変化をみる指標の一つとして、重要種を対象に集計を行い、経年的に確認されにくくなっている種、分布域が狭くなっている種がないかどうか、その確認状況の変遷を整理しました。

カスミサンショウウオは本州の鈴鹿山脈以西、四国の瀬戸内海沿岸、九州北西部などの低地に分布している日本固有種です。

トウホクサンショウウオは東北地方と新潟、群馬、栃木、茨城県などに分布している日本固有種です。海岸付近から標高 1500m 近くの高所まで幅広く分布しています。

イモリは本州、四国、九州に分布している日本固有種です。水田や池、小川などに生息しています。

トウキョウダルマガエルは関東地方、仙台平野、信濃川流域に分布しています。平地や盆地の水田や池などに生息しています。

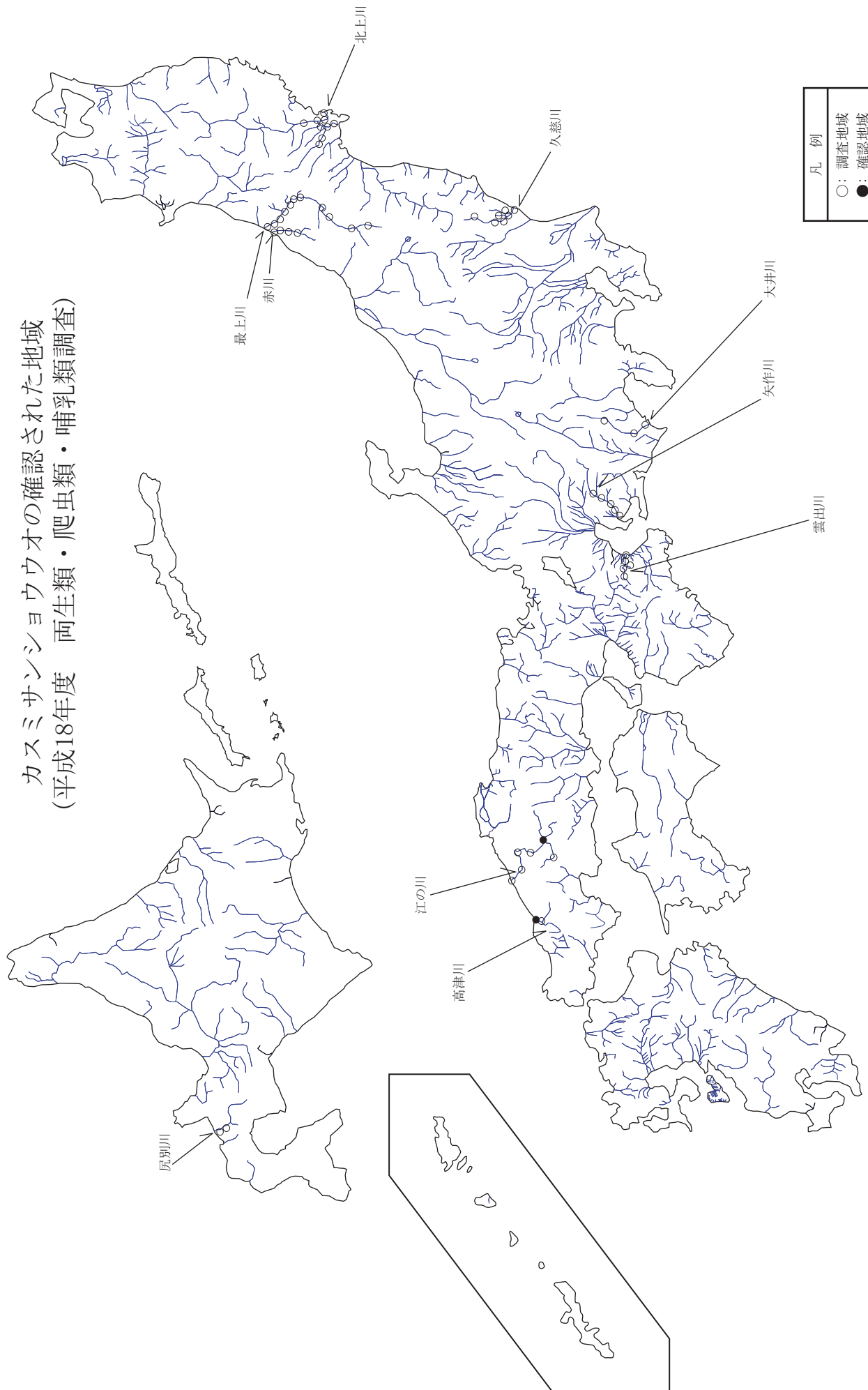
カモシカは本州、四国、九州に分布する日本固有種で、近年、東北地方、中部地方を中心に

分布域が拡大しています。低山帯から亜高山帯にかけてのブナ、ミズナラなどが優占する落葉広葉樹林、針広混交林に多く生息しています。

重要種は、分布域が限られており、環境変化による生息状況の悪化が懸念されています。今回確認された重要種のうち5種について、その確認状況の変遷を整理しました。その結果、今回とりまとめを行った10河川のうち、対象種の確認された河川は2~5河川と少ないものの、東北地方の北上川と関東地方の久慈川のイモリを除いて、2巡目もしくは3巡目調査で確認されていたにもかかわらず、今回調査で確認されなくなった対象種はみられませんでした。

以上より、重要種の生息状況に大きな変化はないものと推察されますが、重要種は、生息地の改変などの影響を受けやすいことから、今後とも引き続きモニタリングをする必要があると考えられます。

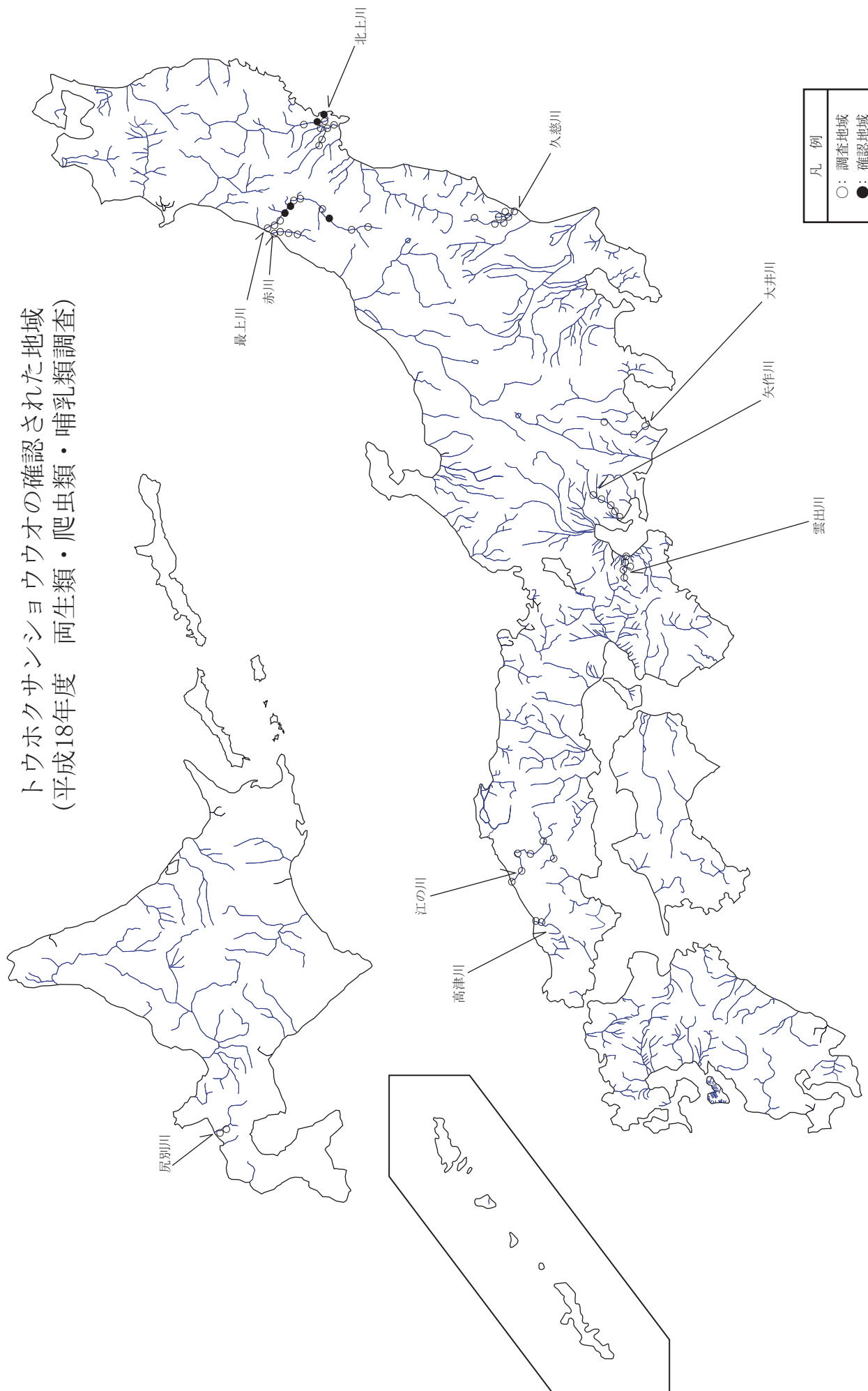
カスミサシヨウウオの確認された地域
(平成18年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



凡 例	
○	調査地域
●	確認地域

注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。

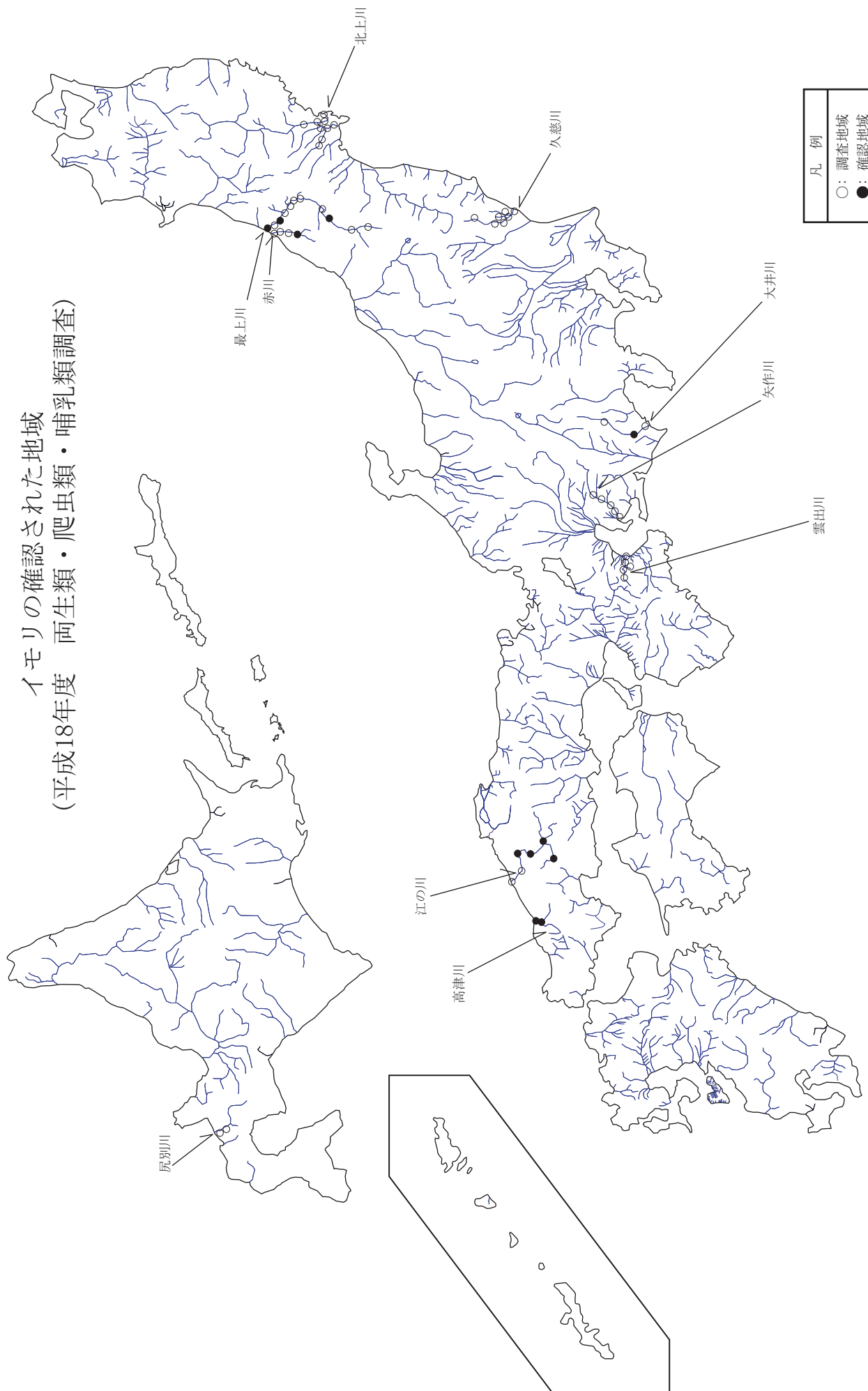
トウホクサンショウウオの確認された地域
(平成18年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



凡 例	
○	調査地域
●	確認地域

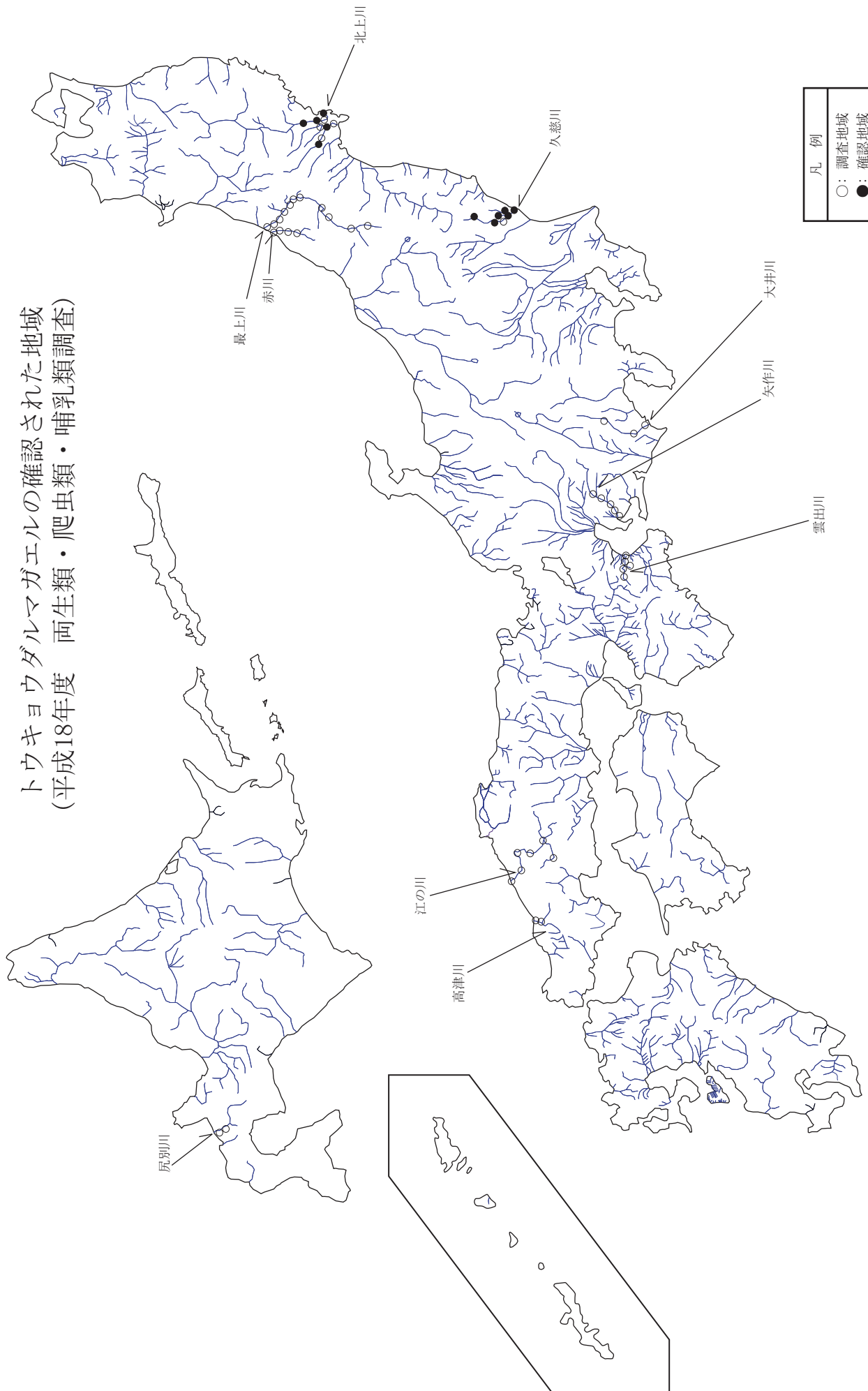
注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。

イモリの確認された地域
(平成18年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



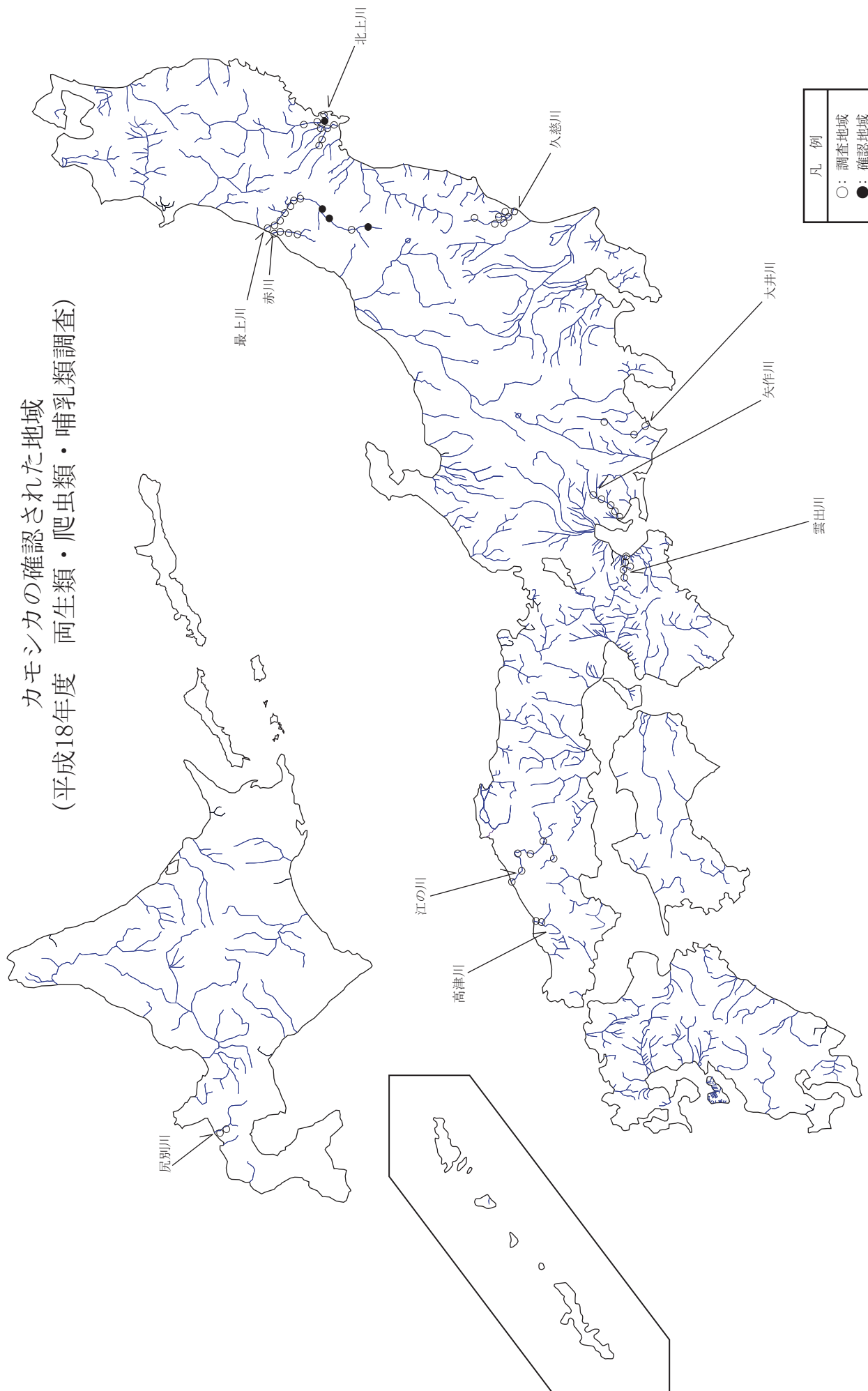
注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。

トウキョウダルマガエルの確認された地域
(平成18年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。

カモシカの確認された地域
(平成18年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。
○印の中に複数の調査地区が含まれることがある。

● **カヤネズミを関東地方以南の6河川で確認**

高茎のイネ科やカヤツリグサ科草地に営巣するカヤネズミは、近年、ヨシ原等の河川環境の変化により、その生息域が減少傾向にあると考えられています。そこで、確認状況の変化から、河川及び河川周辺環境の変化の把握を行いました。

今回とりまとめを行った10河川のうち、従来知られている分布範囲内の6河川全てで確認されました。また、2巡目調査から今回の調査結果をみると確認河川数は増加しました。
(資料掲載:5-24、5-37～5-40ページ)

確認河川数の比較

種類	1 巡目調査 (0 河川)	2 巡目調査 (6 河川)	3 巡目調査 (6 河川)	今回調査 (6 河川)
カヤネズミ	0 河川 〔 0 〕	3 河川 〔 50.0 〕	5 河川 〔 83.3 〕	6 河川 〔 100.0 〕

1～3巡目のデータは今回調査が行われた河川のうち、種名等について真正化され、河川環境管理システムに格納されている調査データを対象にした。

() 内は対象河川数を示す。

[] 内は確認河川数の対象河川数に対する%を示す。

対象河川はカヤネズミの分布域内の河川を対象とした。

カヤネズミは本州の太平洋側では宮城県南部以南、日本海側では石川県以南、四国、九州、隠岐、淡路島、豊島、因島、対馬、天草諸島下島に主に分布します。高茎のイネ科やカヤツリグサ科草地に営巣する本種は、近年、ヨシ原等の河川環境の変化により、その生息域が減少傾向にあると考えられています。

今回の調査結果をみると、カヤネズミは関東地方以南で確認されており、従来知られている分布範囲内の6河川全てで確認されました。また、2巡目調査から今回の調査結果をみると、確認河川数の増加がみられました。また、2巡目もしくは3巡目調査で確認された河川の全てで、今回調査でも確認されました。なお、カヤネズミは、高茎のイネ科やカヤツリグサ科草地に営巣するため、これらの確認状況は、調査範囲の違い等の影響を受けると考えられます。

カヤネズミは河川整備などの影響で生息域が狭められ、生息数も減少していることが知られています。従って、今後も引き続きモニタリングを続け、本種の生息状況を明らかにしていくことが必要であると考えられます。

